



2022年 (令和4年)

11月号 (No. 930)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

北アルプス全山単独無補給縦走 一三百名山31座のピークハント	1
近藤信行さんとの思い出の山行 霞沢に小島鳥水の足跡を追う	4
岐阜支部創立50周年記念事業を 高山市で実施	6
猪熊講師の「山の天気ライブ授業」を 塩谷町と栃木県民の森で開催	7
「霊山に山小屋を建てたい」支部員 が建設・管理する青柳山荘	8
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
② 比叡アルプス	9
② 多紀アルプス	10
東西南北	12
活動報告	13
アルパインフォトクラブ/科学委員会/山行委員会	
支部だより 宮崎支部	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
新入会員	19
図書受入報告	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

北アルプス全山単独無補給縦走 一三百名山31座のピークハント

東海支部青年部 草野駿希

日本海・親不知海岸から乗鞍岳まで、北アルプス全山の単独無補給による大縦走を、東海支部の草野駿希会員(23)が成し遂げた。とりわけ本会選定の「日本三百名山」31座の頂を踏んでいる。取り立てて珍しい記録ではないが、高齢化が叫ばれて久しい本会にとって、若手会員の意欲的な活動は、大変喜ばしいニュースだ。

初めまして、東海支部青年部に所属する草野駿希と申します。

私が登山を始めたきっかけは、いかにも現代風ではありますが、山に登るアニメを見て同じような景色を見たいと思ったからです。高校2年から自転車で登山口まで行き、独りで登っていました。そこから大学に入学して登山サークルに入り、北アルプス縦走やクライミング、沢登り、雪山、バック

カントリー・スキーと、たくさんの経験をすることができました。

私が所属していたサークルが日本山岳会東海支部の東海学生山岳連盟に加盟していたため、大学在学時から東海支部に関わりがありました。その東海学生山岳連盟では2年間、学生部の委員長として活動しておりました。大学卒業後の今年からは東海支部の青年部に入り、現在に至ります。



9月19日、親不知海岸からいよいよ大縦走をスタート

敗退を経て再挑戦へ

皆さんは「北アルプス全山縦走」と聞くと、どのようなルートを思い浮かべるだろうか。

1年前の2021年の春、当時大学生であった私は、気になって

調べてみた。ネット上で見かける山行記録は、日本海の親不知海岸から梅海新道を経て後立山連峰を歩き、最短コースで上高地へ行くのを全山縦走としているのが多かった。もちろん、これらもすばらしい山行で、海拔ゼロから3000mへ登る、もしくは逆に下りるのは山と海が結ばれており、世界が大きく変わる。こんな大冒険を自分もやってみたいと感じた。

21年の夏、大学も長期の休みであることから、当時所属していた東海学生山岳連盟のひとりとして計画を立てて挑戦した。このときの計画は単独・無補給で、日本海の梅海新道から入山して後立山連峰を歩き、剣岳にも行って上高地、そして乗鞍岳を目指すものであった。計画としては、実動が20日間



唐松岳頂上山荘で滝根支配人(東海支部会員)と

に予備5日間の合計25日間の山行計画であった。

結論から言うと、この山行は失敗に終わった。入山初日に台風が直撃、通過後も悪天続きと天候に恵まれず、白馬岳で小屋の方に下山すべきと強く言われて、渋々下山した。反省点としては無補給ということで装備が想像以上に重く、水を含めて最大38kgとなり、海拔ゼロmから標高を上げるためには体力の消耗が激しかった。ウェア関係では雨具が低性能で、ビショビショに濡れて低体温になった点などもある。そして、このときは気持ち的にも負けて、小屋で下山を勧められたときに抗う気力も起

きなかった点も挙げられる。

再挑戦の計画と準備

22年の春、私は大学を卒業した。1年前の敗退にもめげず山には登っていた。そんな私の中で、山を別の視点から見てみたいという気持ちが生まれ、今夏の2ヶ月間、山小屋でアルバイトすることを決めていた。同時に終わった後は、何か大きな挑戦をしたいという気持ちもあった。そこで思い出したのが敗退した1年前の山行である。

学生時代から大変お世話になっている東海支部の高橋支部長に相談をしたところ、支部長から東海支部がサポートをするというお話をいただいた。これまでの山行経験や前回の敗退した山行の反省のなかで、自分の意思の弱さを痛感しており、独りでは諦めてしまうかもと考えていた私にとって、支部からのサポートがあることはとても心強く感じた。

そんな経緯もあり、挑戦を決意した。さらに、前回よりも計画を拡大、北アルプス内にある日本三百名山のピークハントを考えた。それには理由がある。日本三百名山は日本山岳会によって選定され

た山々である。東海支部の一員としてこれらの山々に登ることは、大いに意味があると思ったのだ。

日本三百名山について調べると、北アルプス山域としては34座あることが分かった。その中で毛勝山、鍬崎山、鉢盛山の3座については主脈から遠く、人力のみで行くには困難であると判断した。こうして残りの31座を、単独でかつ無補給で踏破しようという計画が決まったのである。

今回は予備日を含めて最大42日間と見積もった。装備については前回と同じく最初から全てを担いで「無補給」という計画である。使用するザックは容量100ℓではあるが、少しでも軽く、嵩張らないよう心掛けた。まず朝夕の食料はアルファ米として、山行中に飽きないように複数のメーカーの様々な味を合計84食用意した。ほかにもバーナーを燃費が良い物に替えて、持つて行くガス缶の個数を減らした。前回の反省から減らせる装備を見直した結果、水を除いて30・4kgとなった。水を2kg少し足したとしても33kgというこ

ものの、装備量は5kg減らすことに成功した。前回の山行と比べて、本気度が違ったのだ。

北アルプス全山縦走を完遂

山行としては基本的にはテント泊で、一般登山道を32日間ひたすら歩き続けた。一般登山道なので特に難しいと記憶に残ったのは、あまり多くない。覚えていることとしては、最初の海拔ゼロmから白馬岳まで、標高差3000m近くのアップダウンを繰り返しながら登っていくのは体力、気力ともにきつかった。また、穂高岳山荘からジャンダルム、西穂高岳間も縦走装備では苦戦した。それ以上今回の山行で最も厳しかったのは10月16日、登山28日目となる行程である。トレラン装備で1日の歩行距離42km、獲得標高は5000m以上を記録した。

今回の山行では、今まで以上に人とのつながりや、人の温かさを強く感じた。まずは夏の2ヶ月間働いた唐松岳頂上山荘に到着したときである。唐松岳の山頂から下りているときから、一緒に働いた仲間たちが小屋から手を振って出迎えてくれていた。小屋に着くと

すぐに皆が集まって歓迎してくれて、とてもうれしかった。また、家族や東海支部の方々からも頻繁に応援メッセージを送ってもらい、頑張る力をもらった。

また、今回は個人的に利用しているSNSのTwitterで山行経過について発信していた。山行中にその発信を見たという登山者から3日に一度くらいの頻度で声を掛けてもらえた。独りで歩いているので人と話すことが楽しく、また、声援をいただき歩き続ける力が湧いてきた。なかには行動食をくださった方もいた。たくさんの方々からのご声援を受けて計画を達成できたと、改めて思う。



10月13日、今回の山行の最高峰である奥穂高岳に登頂

山行を終えて想うこと

今回の山行では、登山アプリのヤマレコで記録を残していた。最終的な記録としては登山日数33日間、歩行距離530km、獲得標高4万7262mとなった。

山行を終えて何か変化があったかと言えば、特にない。まだまだ登りたい山はたくさんある。国内のロングトレイルにもまたチャレンジしたいし、冬季登攀ももっとやりたい、海外の山にも行きたいと、考えればきりが無い。次の大きな山行計画は決まっていらないが、これからも、もっともつと山に登りたいと思う。



10月20日、ファイナル・ピークとなった乗鞍岳に登頂

最後に、今回の山行について家族の応援はもちろん、東海支部の皆様にも多くのご支援をいただきました。篤くお礼申し上げます。また、山行中に会い、関わった方々にも、この場をお借りしてお礼申し上げます。今後も、さらなる高みを目指して精進してまいります。

【行動概要】

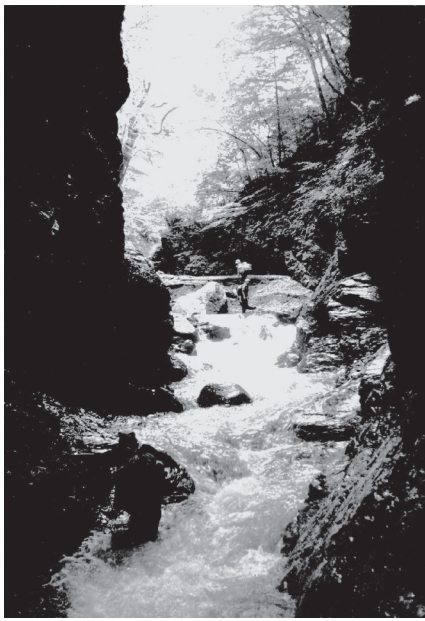
- 9月19日…日本海 親不知海岸・榎海新道・白鳥山・白鳥小屋
- 20日…犬ヶ岳・榎海山荘
- 21日…朝日岳・朝日小屋
- 22日…雪倉岳・白馬岳・天狗山荘
- 23日…不帰キレット・唐松岳頂上山荘（到着後に同山荘でアルバイト）
- 24日…同山荘でアルバイト
- 25日…同山荘でアルバイト
- 26日…五竜岳・鹿島槍ヶ岳・冷池山荘
- 27日…爺ヶ岳・針ノ木岳・針ノ木小屋
- 28日…蓮華岳・船窪小屋
- 29日…不動岳・烏帽子小屋
- 30日…野口五郎岳・雲ノ平山荘
- 10月1日…水晶岳・赤牛岳・鷲羽岳・雲ノ平山荘
- 2日…雲ノ平山荘・薬師沢出合
- 3日…薬師峠
- 4日…立山往復
- 5日…奥大日岳・往復
- 6日…剣岳往復
- 7日…停滞
- 8日…五色ヶ原・薬師岳・薬師峠
- 9日…黒部五郎岳・三俣山荘
- 10日…停滞
- 11日…双六小屋・笠ヶ岳往復
- 12日…槍ヶ岳・大キレット・穂高岳山荘
- 13日…奥穂高岳・西穂山荘・上高地・小梨平キャンプ場
- 14日…徳沢・蝶ヶ岳ヒュッテ
- 15日…常念岳・大天荘
- 16日…燕岳・餓鬼岳・中房温泉・有明山往復・大天荘
- 17日…水俣乗越・槍沢・小梨平キャンプ場
- 18日…霞沢岳往復
- 19日…焼岳・道路12km 徒歩・平湯キャンプ場
- 20日…平湯乗鞍登山道・乗鞍岳往復
- 21日…安房トンネル・上高地線道路歩き・沢渡バスターミナル

RECOLLECTION

近藤信行さんとの想い出の山行
霞沢に小島烏水の足跡を追う

烏水は霞沢のどこを越えたのか

『小島烏水の『鎗ヶ嶽探検記』は、探検時代の日本アルプスに文学的香気をあたえた記念碑的作品である。そして明治三十五年八月十七日の槍ヶ岳登頂は、近代登山の黎明をつげる輝かしい記録としてよく知られている。ところが、この探検記のうちで、「霞澤の急湍を渉る記」における烏水の足跡だけが、どうしても正確につかむことができなかった。思いあぐねて私は、烏水一行とおなじ条件のなかで、この古い登山路を、二度にわ



極端に狭まる「ネヅミ落し」のゴルジュ

たつて追体験することになった。『山と溪谷』昭和51(1976)年7月号の「霞沢に烏水の足跡を追う」と題したモノクログラフで、近藤信行さんが綴っているリード文である。

この2年後、『小島烏水 山の風流使者伝』で大佛次郎賞を受賞することになる近藤さんは、昭和45(1970)年8月から、山の文芸誌『アルプ』に烏水の伝記を書き始めていた。明治30(1897)年以降の烏水の足跡を追いつけてきたが、どうしても明確にできなかったのが二つあった。その一つが明治35年の槍ヶ岳登山時の経路であるという。

上高地の東にそびえているのが霞沢岳(2646m)だが、その東

節田重節

面に、沢渡から真北に向かって食い込んでいるのが霞沢だ。昭和49(1974)年8月、近藤さんはまず1回目の霞沢探査行を企画し、日本登山史研究の泰斗、山崎安治さんとともに、烏水一行と同じ条件で追体験することにした。

沢渡から霞沢を遡り、最奥の二俣を左手の本谷に入って霞沢岳の頂上に立ったが、これは明らかに烏水ルートではなかったと判断、八右衛門沢を下っている。その山行の詳細は、本会会報「山」1974年11月号に「霞沢岳の東面―小島烏水追跡紀行―」として発表している。

2回目探査は右俣を目指して

《はじめからの予定どおり、つぎに右俣をつめてみよう、そうすれば明治三十五年の烏水の足跡がはつきりするにちがいないとおもえた。その夜、上高地の山研に泊まって、山崎さんとしきりと追跡登山の課題を話しあった。》と綴っているのは、会報1976年3月号・4月号に掲載された「続・霞沢岳の東面(上)(下)」と題した寄稿。近藤さんは2回目の探査行を試みることにした。当時、『山と溪



二俣付近の河原から見上げた霞沢岳と近藤さん

谷」誌の編集長をしていた筆者は、写真撮影を兼ねて同行取材をお願いした。今回も山崎さんが同行されるので、1人のボッカでは心もとない。そこで山岳部の先輩2人にも助っ人をお願いした。1人は植村直己さんの同級生で、日刊スポーツ新聞社で山崎さんの後輩でもある中出水勲さん。もう1人はその1年先輩の高橋登美夫さん。

「ネヅミ落し」も難なく通過

テント2張にたっぷりの食糧、2ダースの缶ビール。昭和50(1975)年8月14日、松本駅に集まった5人は、早速、沢渡から霞沢に入った。13時16分。



◦霞沢乗越、から見た明神岳(右)と岳沢

《こんなときに大きな
てくる。
本流が細く、どれが右俣
流が細く、どれが右俣
本流が分かんなくなっ
てくる。
《こんなときに大きな

歩き始めはほぼ平らな、広々とした河原を進む。右に左に徒渉を繰り返していくとやがて左右の山肌が迫ってきて、霞沢は廊下状になる。兩岸に岩壁が屹立し、狭い門のような地形になっている辺りが難所と言われる「ネヅミ落し」ではなかろうか。その名を聞いて覚悟していたが、腰ほどの徒渉で楽々と通過してしまった。

を囲み、ボツカ隊が運んできた豊富な食糧と缶ビールで夕食とした。鳥水が『文庫』に発表した「鎗ヶ嶽探検記」のコピーを持参している近藤さんは、山崎さんと盛んに明日の行程を論議している。

◦霞沢乗越を越えて白沢へ

翌朝8時、テントを畳んで出発。一直線に北に向かって突き上げている霞沢は長い。左手から合流する下大ダシ沢や上大ダシ沢の出

合を過ぎて、なおも次第に高度を上げていく。累々たる堆石の河原歩きが続く、やがて伏流水となった辺りが二俣で、霞沢岳が姿を現わしてきた。1回目の探査で突き上げた白

いガレ沢がよく見える。いよいよ待望の右俣に入る。近年の地形図では「カミウチクボ」と

いう名前が付されている沢だ。左俣に比べ水流が細く、どれが右俣本流が分かんなくなっ

てくる。
本流が細く、どれが右俣
流が細く、どれが右俣
本流が分かんなくなっ

てくる。
本流が細く、どれが右俣
流が細く、どれが右俣
本流が分かんなくなっ

《こんなときに大きな
てくる。
本流が細く、どれが右俣
流が細く、どれが右俣
本流が分かんなくなっ

役割をはたしたのは、節田君の木登りであった。ほかの者が煙草をくゆらしているうちに、彼はするすると木にのぼって、地図をひろげながら上部斜面を偵察する。

「あれは佐渡の生まれなんで、いつもあとして本土をながめていたんですよ。猿みてえだなあ」

おなじ山岳部OBの中出水、高橋両君も感嘆久しうしていた。『と、とんだ与太話まで会報に書かれてしまった。』

最後はマルバダケブキやトリカブトなど背の高いお花畑をやぶこぎして、やつと稜線にたどり着く。15時30分。徳本峠から二六白山、霞沢岳に続く稜線上のこぢんまりした乗越で、我々はこれを「霞沢乗越」と名付け、大休止をとった。

一服後「霞沢乗越」を文字どおり乗っ越し、いきなり反対側の白沢源流部を下る。樹木の密生した斜面をかき分けて下降、白沢右俣本流に合流したらしめたもの。大事に残しておいた缶ビールを沢水で冷やし、近藤さんを囲んで祝盃を挙げる。短い山行ではあったが、作家・近藤信行さんの、史実解明に対する執念を垣間見た2日間であった。

役割をはたしたのは、節田君の木登りであった。ほかの者が煙草をくゆらしているうちに、彼はするすると木にのぼって、地図をひろげながら上部斜面を偵察する。
「あれは佐渡の生まれなんで、いつもあとして本土をながめていたんですよ。猿みてえだなあ」
おなじ山岳部OBの中出水、高橋両君も感嘆久しうしていた。『と、とんだ与太話まで会報に書かれてしまった。』
最後はマルバダケブキやトリカブトなど背の高いお花畑をやぶこぎして、やつと稜線にたどり着く。15時30分。徳本峠から二六白山、霞沢岳に続く稜線上のこぢんまりした乗越で、我々はこれを「霞沢乗越」と名付け、大休止をとった。
一服後「霞沢乗越」を文字どおり乗っ越し、いきなり反対側の白沢源流部を下る。樹木の密生した斜面をかき分けて下降、白沢右俣本流に合流したらしめたもの。大事に残しておいた缶ビールを沢水で冷やし、近藤さんを囲んで祝盃を挙げる。短い山行ではあったが、作家・近藤信行さんの、史実解明に対する執念を垣間見た2日間であった。



お花畑の中を最後のヤブこぎで◦霞沢乗越へ。
近藤さん(前)と山崎さん

「七十三年ぶりに不明確な部分をたしかめ得たのは、愉快な追跡登山であった。」と近藤さんは述懐しているが、その追跡登山からさらに47年後の今年7月17日、近藤さんの計報が届いた。昭和60(1985)年には、山崎さんが早々と鬼籍に入られ、令和2(2020)年、中出水さんと高橋さんが相次いで旅立たれた。

「霞沢追跡登山隊」一行5名のうち、とうとう私だけとなつてしまった。残された44枚のモノクロ・プリントとともに……。

（明治大学山岳部OB、千葉支部会員）

REPORT

岐阜支部創立50周年記念事業
を高山市で実施

本年10月23(日)・24(月)の両日、日本山岳会岐阜支部の創立50周年記念事業を執り行ないましたので、ご報告いたします。

2年前に記念事業実行委員会が発足しましたが、折からのコロナ禍により、実施すべきかどうか逡巡しておりました。しかし、希望的観測の下、記念事業はフルセツトで実施すると同時に、ホスピタリティを最優先し、式典中心ではなく参加していただく全員が「楽



記念登山の参加者で溢れんばかりとなった猪臥山山頂

岐阜支部事務局長 東明裕

しめる会」を創り上げることを目的に、プログラムを固めていきました。当初、参加者は30〜40名程度を予測していましたが、蓋を開ければ全体で100名近くの方がおいでくださいました。多くの皆様にお集まりいただき、予定した全てのプログラムを難しい状況下で完遂でき、まさに感無量です。

23日は13時から受付を開始。まずは創立50周年の記念式典として、岐阜支部長・高木基揚の挨拶から始まり、ご来賓のご紹介・ご挨拶を経て、副支部長・堀義博より「岐阜支部50年の歩み」を説明させていただきました。ご来賓としては本部より古野会長・橋本副会長・萩原常務理事にご参加いただき、誠にありがとうございました。

ご挨拶の中で古野会長がお話された56豪雪時の別山・白山登山は、我々の近所の山への冒険心を、改めてかき立たせるものでした。また、「50年の歩み」の中から、「岐阜支部と山と酒」の深い縁を学ぶ

ことができ、偉大なる先達者の背中を垣間見ることができました。

式典後は、当支部の毎年恒例の公事業である「山岳講演会」に移行。講演はご来賓でもある萩原常務理事にお願ひし、タイトルも「ぜひ「岐阜県の山の魅力」笠ヶ岳に学んだこと」でした。本講演会是一般の市民にも公開し、150名もの方々の参加がありました。萩原元編集長が若き日に通つた笠ヶ岳の数々のバリエーション・ルートの話に惹き付けられた、すばらしい講演会でした。

その後は祝賀会となり、ご祝儀でいただいたお酒で歓談に。途中から歌手のリビート山中氏をゲストとしてお招きし、その演奏の下、当支部の作った記念品である歌集を用いて全員で大合唱。楽しい祝賀会となりました。山々には「酒」と「歌」が必須の装備であることを思い知らされたのでした。

翌24日は記念登山。8時半に猪臥山^{いぶし}に向けて出発しました。猪臥山は1519m、二等三角点を有する展望の山で、天候に恵まれれば山頂からは360度の大展望が開けます。ただ、当日はお天気が良かったものの高い山には雲が

懸かり、北アルプスや白山、御嶽山などの姿を拝むことはできませんでした。しかし、岐阜を取り巻く低山と高山や飛騨古川の町並みを樂しむことができました。

「全員登頂」をモットーとしていたのが達成でき、60人近い会員で山頂が溢れ返ることとなりました。ここでも再びリピーター山中氏のミニ・コンサートが開かれ、弁当をつまみながら、山の頂にて山を見ながら山の歌を唄うという贅沢な時間を持つことができました。

ホテルに戻り、準備を含め長きにわたった当支部の創立50周年記念事業は全て終了しました。価値観をともしにする仲間と共通の時間を過ごし、雄大な山に登り・語り・呑み・唄うことがいかに大切かを再認識し、日本山岳会への帰属意識を強くした2日間でした。

ご参加いただいた皆様方、並びにご来賓の皆様方に、心より感謝申し上げます。50年の歴史を重ねて、岐阜支部はさらなる発展に向けて活動を続けていく所存です。それが日本山岳会全体への貢献につながれば、大変幸せであると感謝しております。

REPORT

猪熊講師の「山の天気ライブ授業」を
塩谷町と栃木県民の森で開催

栃木支部は「日本山岳会創立120周年記念事業」の一環として、10月1日(土)・2日(日)に、猪熊隆之氏の「山の天気ライブ授業」を開催しました。

1日目は、栃木県塩谷郡塩谷町

にある、閉校になった学校(元熊ノ木小学校)をそのままに利用して、宿泊や田舎体験のできる施設とした「星ふる学校くまの木」で座学講習を行ないました。参加者は支部会員8名、一般参加者13名の計21



猪熊講師の座学講習は大変分かりやすく、説得力十分



意に反して無風快晴だった実習。ミツモチ山第1展望台にて

栃木支部 菱田克彦

名でした。猪熊講師による122枚に及ぶスライドを使った、大変分かりやすく、説得力のある講習で、百戦錬磨の技術によって、参加者は、時間が過ぎるのを忘れさせられました。

講義は、(1)山の天気のコホン、(2)もつとも怖い気象遭難・低体温症の事故、(3)落雷と局地豪雨から身を守る、(4)栃木県の気象遭難、(5)気象遭難を防ぐための方法の5つのパートで構成されていました。

イントロ部分での「天気予報を

利用している人が遭難している」という話には驚かされ、これまで雨が降るか降らないか天気予報しか見ていなかったことを反省しました。「山の天気のコホン」では、天気図の等圧線の向きと間隔から風向と風速の読み取り方を、豊富な事例を使って分かりやすく教えていただきました。雷の話は、栃木県が落雷の多い所であり、山の上だけのことではないので、皆さん熱心に聞いていました。

あまりに熱のこもった講義によってやや時間が押ししてしまい、最後の方はやや駆け足になってしまいました。全体として皆さんが分かっているようで分かっていないこと、分かっているけど行動に移せていないことを、たくさん学ぶことができました。スライドに出てくる山や雲の写真がきれいだったことも印象的でした。

2日目は、昭和49(1974)年、明治百年を記念して矢板市高原^{たかはら}県有林の中に設置された「栃木県民の森」に車で移動し、そこからツツジの名所、ミツモチ山(1248m)に登りながら実習を受けました。

まず、猪熊講師から観天望気の説明を受けてから、ミツモチ山へ向けて出発しました。この日は、無風快晴のあいにくの? 天気になつてしまったため、いろいろな雲を見ることはできませんでしたが、空の様子を見るに当たつての留意事項や、ミツモチ山の後ろに控える高原山の気候の特色などの話を聞きながら、ゆつくりと登山しました。

ミツモチ山の山頂近くは、林道を抜けて行く道となり、空も開け、飛行機雲がくつきり。さらには、はるか天空には巻雲が幾筋か現われました。雲を観察する会なので、講師も思わず歓喜の声を挙げられ、説明にも気合いが入りました。山登りに来ていて、雲がないことにながっかりし、雲を発見して感動するとは、めつたにないことです。山頂直下の広場で昼食をとりながら山の天気談義をした後、山頂の後になりました。

最後になりましたが、猪熊講師にはお忙しいなか、栃木支部のために時間を割いていただき、ご講義くださいましたことに大変感謝をしております。ありがとうございます。

CLUB LODGE

「霊山に山小屋を建てたい」
支部員が建設・管理する青柳山荘

福島支部 青柳 勲

福島市と相馬市を結ぶ国道11

5号沿いに標高825mの霊峰・霊山が、北西から南東にかけて横たわっている。今から約1100年前、天台宗の慈覚大師円仁がこの岩山をインドの霊鷲山になぞらえて「霊山」と名付け、南奥州における天台宗布教の拠点として寺を建立、最盛時には3600人もの僧坊を擁していた、との言い伝



霊山の山懐にこぢんまりとたたずむ青柳山荘

えもある。

南北朝時代には北畠一族がこの地を支配、その後の相次ぐ戦乱で多くの神社仏閣が焼失した。現在は、北畠顕家が国府を開くために奉じた義良親王（のちの後村上天皇）を慰めるための「濫觴（盃を浮かべる意）の舞」と呼ばれる神楽が、地元石田地区の人々により受け継がれている。

霊山はこの歴史的背景と相まって巨岩・奇岩が屹立する変化に富んだ山容から、県内外から老若男女など多くの登山者が訪れる。春夏秋冬折々の景観を楽しめることはもちろん、山頂から360度の展望が楽しめ、蔵王や吾妻連峰、安達太良山をはじめ阿武隈の山々、そして、はるか太平洋などを見ることができる。

この地に「山小屋を建てたい」。41年間、地方公務員として勤務してきた筆者（日本山岳会会員）が長年温めていた夢を実現させたのが、今回紹介する「霊山青柳山荘」であ

る。

建設竣工までには紆余曲折があった。まず建設場所の確保、次にインフラ環境整備、一番の問題は予算の確保だった。全くのゼロからの出発である。夫唱婦随といえば聞こえが良いが、しがたない公務員に余力があるはずはなく、多くの人たちに助けられた。現職時代、親交のあった建設会社社長はじめ地権者、森林組合長等々の面々から協力をいただき、JACの持つ偉大さを肌で感じた。

建設場所が決定してからは、自費で建設機械（ユンボ）を購入し、整地、井戸掘り、電柱立て、駐車場所の整地と本当に大忙しであった。特に井戸掘りには難儀した。地下水の湧く深さまで約5mの穴を掘り下げ、そこから小屋まで水道鉄管を埋め込み、動力ポンプを取り付けて汲み上げる。なんといつでも、基本的には電気、水道、燃料に困らない山小屋建設を目指したのだ。

山小屋の竣工完成は平成18（2006）年5月のこと。自分の山小屋を持ちたい、定年退官後はそこで思いっきり仲間と山談義をし、大自然とともに暮らしたい。建設

構想から実に20年の歳月を費やし、ようやく完成を見たのである。

構造は木造平屋建て41・25平方m、内部ロフトの設置、蛇口付き水道、電気配線、灯油窯の浴槽、LPガス台所、薪ストーブ、屋外バーベキュー台設備等々、遜色はない。

小屋北方には霊峰・霊山が目前に迫る。広葉樹林に囲まれ、新緑の季節は見事である。紅葉期は霊山の岩峰群とのコントラストが抜群だ。

完成後は、主に福島支部会員のための小屋として年に何度か宿泊・懇親の場として提供してきた。ほかの山岳団体にも宿泊施設として利用してもらった。厳冬期には、近くの沢が氷瀑となるので絶好のアイスクライミング・ゲレンデとなり、その宿泊先としても開放している。

2011年3月の東日本大震災と福島第一原発事故により、小屋付近の放射線測定値も心配されたが、今は正常値に落ち着いている。支部員、山仲間の支援を受けながら、誰もが利用しやすい宿泊施設として管理と活用を図っていきたい。

比叡アルプス

比叡山と大文字山に挟まれた山域は花崗岩質で、その浸食された地形が形成されている。この付近の良質な花崗岩は宮殿や寺院建築材、石仏や石灯籠などに加工されたほか、白川砂として枯山水庭園などに利用されている。ことわざ「白川夜船」の出処地でもある。

「比叡アルプス」は比叡山の南西部、一本松がある登仙台(標高600m付近)から分岐する音羽川上流と、白川上流部に挟まれた京都府と滋賀県の境に沿った尾根を指す。突出したピークもなく、京都市街からは東山の背後、琵琶湖側からも桂川水系と瀬田川水系との分水尾根の背後で目立たない。分岐が多いが道標はほとんどなく、登山者も少ない玄人好みのエリアだ。所々花崗岩が露出した真砂土の登山道には落葉広葉樹が多く、春と秋がお勧めだ。

本稿では、叡山電鉄一乗寺駅を起点に瓜生山を越えて比叡アルプスに取り付き、終点の登仙台から音羽川沿いを下り、雲母坂を経由

京都・滋賀支部 笠谷 茂

し修学院駅へ戻る周囲コースを紹介する。本コースは、「京都一周トレイル」の一部を利用するほか、コース上には「白鳥越え」や「比叡山無動寺大弁財天道」、「雲母坂」といった古道が交差するほか、山城跡が散在する。なお、沢沿いは増水時、通行困難な箇所がある。

【コースガイド】

叡山電鉄一乗寺駅から東に向かって曼殊院通りを進み、白川通りを越えると、古くからの交通の要衝で、宮本武蔵・吉岡一門の決闘でも知られる一乗寺下り松だ。八大神社の鳥居の横を直進すると車道の終点が狸谷不動院で、250段の階段の先に懸崖造りの本殿がある。本殿右手前から奥の院(瓜生山山頂)へ通じる参道を進む。

瓜生山(301m)は北白川城とも呼ばれた城跡で、山頂は広場となっており、祠とその背後にかつて勝軍地蔵が安置されていた石室が残る。京都一周トレイル(以下、TL)の連番標識59・3に従い、比

叡山方向へ進む。TL61とTL62の間の小さなピーク(白鳥山)は北白川城出丸跡で、頂上に看板がある。

比叡アルプスへの分岐(TL63)で尾根から離れ、北東に降りると地蔵谷川だ。洪水により流路が変わり、登山道の一部が消失している。左岸に合流する2本目の沢を過ぎた所が比叡アルプスの取付点で、左手にケルンが積んである。樹林の中

の尾根道を登り、ピーク383直下のトラバース道を詰めれば、比叡アルプスの主稜線に着く。比叡アルプスの登山道は所々花崗岩が露出する真砂土の道で、小ピークを越えながら進む。樹木に覆われているが、所々展望が広がる。正面に比叡山、高度を上げると京都市街が見えてくる。送電線の鉄塔を過ぎ、2つ目のピーク(掛橋分岐、520m)で古道白鳥越えが合流する。ピーク543の南東側を巻くと城跡(二本杉西城)で、曲輪堀

切などが散見できる。やがて展望が開け、NHK比叡山テレビ放送所が正面に現われる。放送所を右に見ながら進むと比叡アルプスの終点、一本杉がある比叡山ドライブウェイの登仙台に着く。滋賀県と京都府の境に位置し、琵琶湖も望める。帰路はドライブウェイ左側の歩





登仙台から望む比叡アルプス(手前の尾根)と京都市街

び左岸に渡ると音羽川が下に離れ、峠である掛橋に着く。広場になっており、石の鳥居(弁財天二の鳥居)と灯籠がある。

ここ(TL67)で京都一周トレイルに合流し、音羽川本流に向けて下る。2本の支流を越え、南北朝時代の遺跡・水飲対陣跡(TL69)だ。ここから京都一周トレイルを離れ、古道雲母坂を下る。U字型に掘れた花崗岩の道は歴史を感じる。鞍部の先、左側(南)には雲母坂城跡がある。よく歩かれた道を下ると雲母坂登山口に着く。雲母橋を渡り、砂防工事が進んだ音羽川に沿って下ると、修学院駅は近い。

【コースタイム】 一乗寺駅(1時間15分)瓜生山(30分)比叡アルプスへの分岐(10分)地藏谷川(50分)比叡アルプス主稜線(1時間40分)登仙台(10分) 東海自然歩道分岐(40分)石の鳥居(20分)水飲対陣跡(45分)雲母坂登山口(30分)修学院駅 合計6時間50分

【入・下山口へのアクセス】 叡山

電鉄一乗寺駅、修学院駅を利用

【参考文献】 『京都一周トレイル 公式ガイドマップ 東山』(京都

一周トレイル会)

連載■ご当地アルプス登山案内22 多紀アルプス

「多紀アルプス」は兵庫県篠山市に位置し、篠山盆地の北部に連なる標高600～800mの山並みで、標高の割には雄大な山稜が東西に延びている。主峰の三嶽(御嶽、793m)を中心として、東の小金ヶ嶽(725m)と西の西ヶ嶽(727m)が連山となり、昔は修験道の行場となっていた。

山稜の岩質は珪岩(チャート)である。ここは本州の分水嶺ともなっており、南側の水は加古川を経て瀬戸内海に流れ、北側の水は由良川を経て日本海に流れている。

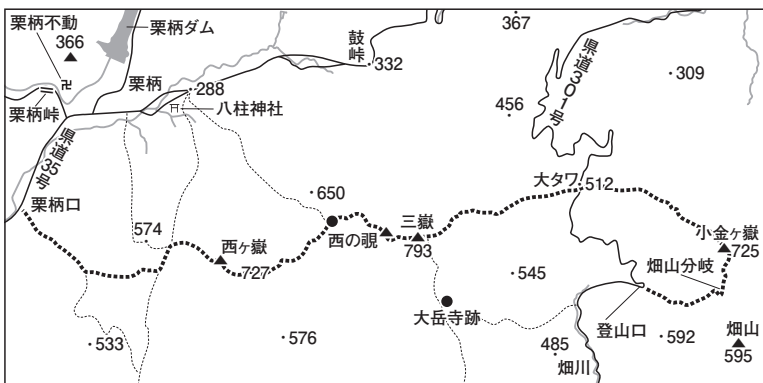
今回は小金ヶ嶽→大タワ→三嶽→西ヶ嶽と、アルプスを東から西にたどるコースを紹介する。

【コースガイド】

大阪駅からならJR福知山線の快速に乗り、篠山口駅で下車する。多紀アルプスの小金ヶ嶽・畑山分岐(コル)への登山口は、県道301号(本郷笹山線)大タワ手前の「車道出合」である。ここまでタクシー利用が便利。

関西支部 薦田佳一

車道出合には約30分で着く。標高は450mほどの登山口には道標(案内板)がある。山道は東に向けて畑山分岐へ、スギやヒノキの樹林帯の緩やかな登りである。20分ほどで畑山分岐に着く。畑山分





小金ヶ嶽を下る岩場の見晴らし台から奥に三嶽を望む

岐からは北に向けて進む。しっかりした小金ヶ嶽への道標(案内板)があり、山頂に向けて緩やかな登りが始まる。

数分で勾配が大きくなり、灌木帯の岩場の登りになる。岩場には立派な鎖が敷設されており、山頂までには数ヶ所ある。岩質は赤みを帯びた珪岩で、濡れると滑りそうなので慎重に足場を確かめて登りたい。登り切った所が小金ヶ嶽山頂である。山頂は少し開けた広場で展望が良く、標識と方位盤がある。西方には、晴れていると主峰の三嶽がきれいに見える。

小金ヶ嶽を後にして大タワ(三嶽)へ向かう。いきなり鎖場の下降

が連続する。ツツジなどの木々が多くなると、北側に開けた「見晴らし台」が現われる。北方の山々の展望が良い。しばらく山道を下り、樹林帯がスギ・ヒノキ林になった辺りで「アスレチック場」が現われる。ここを通り抜けると「大タワ」峠(512m)である。大タワの車道(県道301号)を渡るとのどかな公園となり、奥には東屋やベンチがある。

次に案内の道標に従って霊峰の盟主・三嶽へ向かう。モミの木の樹林帯の緩やかな登りで始まり、50mほどの上り下りをしばらく繰り返した後に開けた台地に出る。三嶽はすぐそこで、30mほど先だ。その台地から少し下ると、右側に役小角像を祀った行者堂(石室)がある。中には石像が鎮座している。役小角が大和の大峯山を開くまでこの山で修行を積んだとも言われ、鎌倉時代から室町時代にかけて丹波修験道が盛んだったと言われている。

石室のすぐ横、北側に2mほど上がった所に展望台があるので、ぜひ足を運びたい。南に深山高原や北摂の山々、西に西ヶ嶽、その奥に白髪岳、虚空蔵山が並ぶ。東

には小金ヶ嶽、その奥には東多紀連山を眺められる。さらに山道を30mほど進むと多紀アルプスの盟主・三嶽山頂に着く。樹木が茂り、展望はあまり良くない。山頂には三嶽・近畿自然歩道の道標および方位盤が設置されている。

次の西ヶ嶽に向けては上り下りの山道が続く、足取りは重くなってきたところでやっと多紀アルプス最後の霊峰・西ヶ嶽に着く。西ヶ嶽山頂からは、東に三嶽のどつしりとした山容が間近に望まれる。

西ヶ嶽から栗柄口へは延々と下りになる。まずは西ヶ嶽山頂から緩やかな下りの稜線を進むと、大きい岩塔(高さ約10m)が現われる。右に赤いペナントの印がある山道を進み、しばらく進むと「至栗柄口の案内板(森とみどりのふれあい)」が現われる。そこから右に丸太でできた階段を下る。延々と下山道が続くが、ほぼ下り切った辺りで手入れされてない茶畑が現われ、壊れかけた建屋の横に「多紀連山登山道 登山口・赤い大きな矢印」の看板があり、栗柄口に到着する。県道97号(丹南三和線)に隣接している。バス停は50m北にあるので、バスでJR丹波篠山駅へ

向かう。また、タクシーも利用できる。



役小角像を祀っている行者堂(石室)

【コースタイム】車道出合(30分) 畑山分岐(50分) 小金ヶ嶽(50分) 大タワ(1時間20分) 三嶽(1時間40分) 西ヶ嶽(1時間30分) 栗柄口バス停

【入・下山口へのアクセス】タクシー・篠山駅(車道出合(所要30分、約5500円) 日本交通(TEL 079-594-1188)

【参考文献】『関西周辺の山』改訂新版(山と溪谷社)『改訂 新日本山岳誌』(日本山岳会編著、ナカニシヤ出版)

【地図】2万5000分の1地形図「篠山」「宮田」「村雲」

東西南北

N

S

檜原村産廃焼却場計画地の現場を見て

清水長正

東京都の水源の一つである秋川源流に近い檜原村人里に、産業廃棄物焼却場の建設計画が持ち上がった。

平野部で生じた産廃物質を檜原村の山奥へわざわざ搬送して焼却、その焼却灰を東京湾岸へ搬出するというものだ。三頭山から南秋川源流部にかけて貴重なブナ林を残している都民の森にも近い場所であり、奥多摩の山々の環境悪化につながる計画と言えよう。地元町村議会でも焼却場で使う地下水などの問題が提起されているが、焼却場そのものの許認可については、東京都によって近々判断される段階にきている。

計画地は、三頭山麓の数馬集落から2kmほど下流、南秋川右岸側

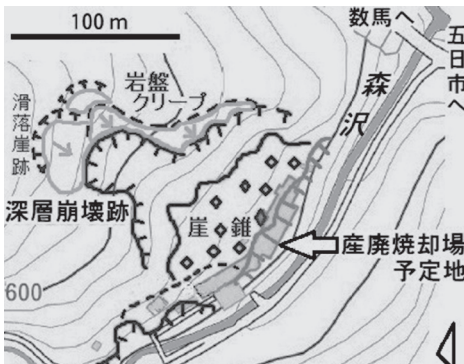


斜面の岩くず堆積物(将来崩れる可能性がある)

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

れよう。もし土石流が発生したとしたら、産廃物や焼却灰などを巻き込んで流出する、去年の熱海のような災害が心配される。

檜原村議会関係方や秋川流域在住の小泉武栄さんと現場を見に行つて、まずは驚いた。防災地形の立場から言うと極めてマズイ場所、計画地背後の斜面に、かつて深層崩壊を起こしていた痕跡が認められたのだ。それが証拠には明治40年の旧地形図で、その斜面に崩壊記号が描かれていた。さらに、斜面を覆うスギ林の地下に脆い岩くず層が厚く堆積していて、将来それが再崩壊する可能性も大きい。産廃施設の立地として、最悪の場所だとはつきり言える。



南秋川森沢の産廃焼却場予定地周辺の地形

地元では、檜原村の産廃施設に反対する連絡協議会(☎090・2313・5987)が立ち上げられている。東京の水源の自然を守るため、山岳会会員各位にもならぬかの協力を期待したいものだ。

(防災地形コンサルタント)

上高地の我が宿、我がお庭

大森弘一郎

「上高地現地講座」を本会の「山の自然学研究会」とNPO法人「山の自然学クラブ」、「交詢社ちきゅう研」という3つの団体の共催で6月11・13日に楽しく開催しました。その20名の参加者から「上高地クラブ」というインタープリターの会が自然発生的に生まれました。そのご報告です。

上高地が好きな方は、どうぞ次回ご参加ください、会員の交流手間はメールとHP、会費はなしの会です。次は「多田多恵子先生の花の知恵」「小泉武栄先生の山の自然から何を観るか」「原山智先生の梓川の石から北アは火山」を順に計画します。HPは「上高地クラブ」で検索してください。

今さら言うまでもありませんが、

日本のアルピニズム揺籃の地である上高地は、我々にとって重要な場所だと再認識しました。そして、私たちJAC会員には山研があり、歩き疲れたら帰れる我が家があるのです。

今回は上高地の重要性を考えて、目代邦康先生（東北学院大学準教授をお呼びして、いろいろ教わりました。登山での通過地点である上高地ですが、まさに自然と地球環境の宝庫でした。

今回歩いた所は大正池や田代池、明神、徳沢の網状流などで、その道中にある梓川、樹木、植生、花蝶、岩魚の塩焼き、石、苔、倒木更新などのキーワードから観察テーマを考えました。河原の石を見たらその出所を考え、植物なら花の知恵に思いを巡らすのです。

十数年昔に、ここで上高地インタープリターという企画を始めていますが、楽しいプログラムです。上高地は、地球環境問題の解決へのヒントが多くある所で、そのことがよく分かります。知識は多い方がよいけれど、その時点での自分の全能力で、自然理解の案内を

すればいいのがインタープリターです。

日本列島が誕生する過程で山々ができました。山があるから海から来た風が上昇して雨になり。雨が降るから植物が育ち、植物があるから動物がいる。山は全ての基なのです。それを上高地は教えてくれます。

人間は、自然の中に生まれた動物です、自然環境というものが人間を律してくれてきました、多分だから進化できたのでしょう。これからもそうでしょう。自然尊重の精神は重要です。上高地から人々はそれを汲み取るのです。

上高地にいて、風の音を聞いていたら、思わず書きたくなったので筆を取ってみました。

付記：今回、1階の展示室に入ってみると、除湿が効いていて乾いており、気持ちのよい状態でした、2面の壁（幅20m）は自由に使える状態で、これならば展示ができます。JACにはたくさん同好会があるのだから、写真や絵や物などを交代で展示して、上高地や山研へ来

るお客さんに説明して見てもらったら良いと思います。ここを有効活用して、「J

活動報告

アルパインフォトクラブ―

第29回写真展「心に映る山々」

当クラブの写真展は毎年、新宿区四谷のポートレートギャラリーで開催してきたが、今年は会場を千代田区半蔵門駅近くのJCIIクラブ25に移して実施した。日本カメラ博物館の隣なので、ご存じの方も多いと思う。会期は9月21日から25日までの5日間、40点の作品を展示した。

昨年の写真展が12月であったので、制作期間が短かったことや新型コロナ第7波襲来で外出を控えたメンバーが多かったことなどの影響で、応募作は例年に比べてやや少なかった。そんな中でも、コ

「ACの山研ここにあり」をどんどん広めていきたいですね。

告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

コロナ対策の緩和を受け、海外（ネパール）へ出かけて作品を出したメンバーもあった。今回の出展作品の特徴は、雪山をテーマにした作品が多く、全体の半数近くあった。会場変更や会期短縮、そして期



コロナ禍でもまぎまぎの来場者があった会場

間中に猛烈な大型台風14号の上陸など悪条件が重なり、来場者は363名と、前年の400名に達しなかったものの、まずまずの成績であった。来場者は、昔一緒に山登りをした仲間や職場での友人などのグループも多く、同窓会さんからの和気藹々とした会場の雰囲気であった。

なお、展示作品はこの後、酒田市総合文化センターや高尾599ミュージアムで巡回展示される予定。詳細なスケジュールはのちほど案内するので確認していただきたい。今回、見逃してしまった方は、日本山岳会のホームページ（ホーム）概要／本部・支部情報／同好会／アルパインフォトクラブ）に出品作品を掲載してあるの鑑賞していただきたい。来年、当クラブの写真展は30回目を迎える。記念すべき年に向けて見ごたえのある作品を提出すべく各自がんばっていききたい。

（松永秀和）

科学委員会

フォーラム「登山を楽しむ する科学Ⅱ」報告

10月2日（日）13時より17時まで新装なった立正大学品川キャンパス・ロータスホールにて表記フォーラムを開催した。本フォーラムは2020年3月実施予定で準備したが、開催直前で折からのコロナ禍により延期となったため、3年越しの開催となったものである。同タイトルでの開催は今回で12回目となり、申込みが180名を超えたことでも登山愛好者になじみ深いイベントとなったことがうかがえた。

当日は160名余の参加のもと、森林インストラクターで樹木医である石井誠治先生の「日本百名山伊吹山お花畑の不思議」で始まった。標高が1300m余と決して高山ではないが、1182cmという積雪深世界記録は今でも破られていない近畿地方の伊吹山は、多雪による山頂付近の草原、そこに白山や立山に由来する北方系植物と四国、九州由来の暖温帯の植物が混ざり、石灰岩質の土壌や麓の砂岩や泥岩地質の影響もあって、特殊かつ多様な植物の宝庫となっている。このような貴重な植生に対する最大の敵は過剰ユースとシカ、イノシシの食害と結んだ石井



3年越しの開催となったフォーラム会場

先生の言葉が心に残った。

2番目は日本山岳会理事で元NHK報道カメラマンの清水義浩先生の「エベレスト登頂撮影はいかになされたか」である。清水先生は1995年に世界初登攀を果たした日大隊エベレスト北東稜遠征にNHKから同行した8名のクルーの一員として登頂までの一部始終を、当時開発されたばかりのハイビジョンカメラに収めたカメラマンだ。

高所、寒冷地下での機材の作動確保や運搬の苦労の後に、快晴無風の僥倖も得て、2名の隊員と2名のシェルパが見事登頂した一部始終をハイビジョンカメラに収めることに成功した経緯を、たくさんの方の貴重な写真で説明していただ

いた。また、NHKスペシャルで放映された『チョモランマ遥か』から抜粋した動画も感動的なものだった。

3人目は鹿屋体育大学教授の山本正嘉先生の「歩行スピードとコースタイムから考える安全登山の科学」だ。まずは「メッツ」という概念説明から始まった。メッツとは安静時の1分当たりの使用エネルギーであり、軽装でゆっくり歩くハイキング（登高速度では300m/h）が6メッツ程度で安全圏だが、無雪期登山や雪山など、バリエーションは7メッツ以上となり、突然死を起こす危険性があるとの説明にびっくり。一般登山者の登高スピード調査のグラフで最頻値は男性が9メッツ、女性が8メッツとの説明にまたびっくり。高齢の身でもつとゆっくり登らなければ、と改めて反省した。

そのほか登山地図の全国2000以上のコースタイム分析で、累積標高差1000mの登り下りは平均で6時間程度であり、これはちょうど6メッツ程度であることなども示された。今後はスマホから得られるビッグデータの解析により全国の山域でのコースタイム

の標準化に取り組み、安全登山を科学から追及していく、との話で締めくくられた。

3先生の熱のこもった、かつフランクな講演に対してフロアからの質問も多く、充実したフォーラムとなった。

(科学委員会委員長・平野裕也)

山行委員会

雲ノ平から南真砂岳縦走

8月4日(木)、夜行バスに乗り、折立登山口へ向かう。

8月5日(金)、7時から9名で登山開始する。車中泊の睡眠不足状態で、これから薬師沢小屋までたどり着けるか不安を抱きつつも、まずは太郎平小屋を目標に登っていく。

私は久しぶりの縦走で、背中のザックも重く感じ、汗だくだくになりながらもまぶしいほどの朝日の中を歩けることがうれしい。正午ごろに太郎平小屋に着き、登山届を提出して、今日の宿泊地である薬師沢小屋へ出発。チングルマ、アオノツガザクラといったたくさんの可愛らしい花々も群生して、まるで私たちを歓迎してくれてい

「海外登山助成対象登山計画」 2022年後期受付中

海外登山助成委員会

本会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

困難を求めている挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員内外から募集します。ぜひご応募ください。

●対象

2023年2月1日～2024年7月末に海外の山へ出発する登山隊

●申込み方法

- 1) 所定の様式をJAC事務局にご請求ください。
- 2) 記入後、登山計画書と併せてメールもしくは郵送してください。

*登山計画書には目的、対象となる山の名前、標高、位置、行程、メンバーの基本情報、予算など登山計画に必要な事項を網羅してください。対象の山が未踏峰の場合、当該国政府発表の山名、標高を記入してください。

●申込み締切

2022年12月31日(当日消印有効)

●審査

審査後、理事会で助成の有無を決定し、2月末日までに連絡します。

●報告と記録掲載

助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌『山岳』に掲載する記事にもご協力ください。

●問合せ・申込み先

JAC事務局 ☎ 03-3261-4433 (月火木10時～、水金13時～、第1・3・5土10時～)

jac-room@jac.or.jp

件名「海外登山助成対象登山計画送付」

〒102-0081

東京都千代田区四番町5番4 サンビューハイツ四番町



広大な雲ノ平を行く

るようだった。

薬師沢小屋に近づくにつれて、北アルプスの深い所へ向かっていく感じがしてわくわくしてきた。薬師沢小屋は、小さな小屋だが、うまい水が豊富で快適だ。到着後、明日からの山行の成功を祈願して、皆で缶ビールで乾杯。

8月6日(土)、5時40分に雲ノ平へ向けて出発。今日も天気が良いそう。さあ、ここからいよいよ今回の山行の核心部だ。長いトレイルだが美しい景色が待っている。薬師沢小屋前の吊り橋を渡るとい

きなり急登が始まる。樹林帯の中で眺望もないのだが、風情ある美しい山道だ。

苔むした岩に滑らないように注意しながら黙々と登る。想像以上に長くてきつかったが、展望が開けた瞬間、そこには広大な台地が広がり、明るい陽の下で輝いて見えた。アラスカ庭園、祖母岳IIアルプス庭園、奥日本庭園、スイス庭園、日本庭園、祖父岳を巡り、雲ノ平の雄大な景色、そして槍ヶ岳、水晶岳、赤牛岳など山々の美しく壮観な姿に心奪われるばかりだっ



水晶岳をバックに記念撮影

た。

雲ノ平では、軽装でトレッキングを楽しんでいる人たちともすれ違い、雲ノ平をゆつくりと楽しんでいる人も多くいた。私たちは、今日の宿泊地である水晶小屋を目指して岩苔乗越、鷲羽岳分岐を越えていく。

青く晴れた夏空の中、槍ヶ岳をずっと眼前に望みながら歩くことができ、写真を撮ったり、皆さんと話をしながら、縦走を存分に楽しむことができた。

8月7日、南真砂岳に登頂し、長い竹村新道を湯俣まで歩く。竹村新道は、岩稜帯や急な登り下りの道が連続して、表情豊かな山道が

続く。この3日間で一番の長丁場であったが、湯俣までたどり着いたときは、歩き通せた達成感と満

足感でいっぱいだった。

(前川みどり)

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

宮崎支部

希少植物のツチビノキ咲く 鉾岳へ

祖母傾国定公園内にある鉾岳(1277m)および鬼の目山周辺には、希少植物のツチビノキが自生している。昨年も開花に合わせ鉾岳を目指したが、時間切れでパツクン岩止まりとなった。今年は1時間早めの6時にヤマダ電器駐車場を出発する。途中、日向組と



屹立する鉾岳山頂

だより

合流、9時15分に鹿川キャンプ場駐車場に着く。準備を整え、体操後の9時30分登山を開始する。1年前の記憶をたどって林道から登山道へ。このあたりでもシカの害があるのかシカ除けネットが設置されている。

スギ林から尾根の樹林帯へ。日射しはないが風もなく、汗が噴き出す。水分補給を心掛け小休止をしながら高度を上げる。日本一の大スラブに圧倒されると間もなく最初の徒渉点に着く。しばし冷たい水や出迎えてくれた草花に癒される。その間にも先に着いた日向組の平田会員たちが安全に徒渉できると、補助ロープの準備や初心者にはハーネスへのカラビナの装着、滑りやすい岩での安全確



鉾岳登山口で出発前の記念撮影

保と万全の注意を払う。全員無事に徒渉完了。

鉾岳大滝を見上げ、去年と同じようにパツクン岩近くに咲くツチビノキに再会。去年は見なかった白いツチビノキにも出会えた。ここからさらに頂上を目指すが、いきなり足場の悪い急登が始まる。岩に設置してあるハシゴやロープに手を掛けながら慎重に足を運ぶ。木々の間に視界の開けた所から、深い谷の向こうにそびえ立つ巨大な花崗岩のスラブが見える。頂上の女鉾(めんどり)の上に数人の人影があり、手を振ると振り返ってくれた。

危険な場所もあったが無事第二の徒渉点に着きほっとひと息つく。



上)ツチビノキの花
左)斜面に咲くツチビノキ



あたりにはツチビノキも数本あり、見ごろを向かえていた。しばし休憩ののち、10分ほどで鬼の目山の分岐に着き、そこから少し林道を歩いて再び登山道へ。12時45分銚岳に着く。そこからは眺望がないので、少し先の開けた所で昼食となる。眼下には鹿川キャンプ場、向かいにはだき山(1420m)、国見山などの山々が連なり、足元にはツチビノキと贅沢なひとときを過ごす。

1時25分下山開始。来た道を下るが登りにも増して厳しく大変だったが、平田会員たちの的確な指

示とロープ設置で慎重に下る。予定より遅れたが4時15分、全員無事にキャンプ場に下山した。
《参加者》服部澄子・栗林淳子・橋

口三枝子・荒武八起・日高研二・武田芳雄・服部岩男・平田五男・栗林忠信・白賀智子・会員外(2名)
(栗林淳子)

会 務 報 告

令和4年度第6回(10月度)理事会

議事録

日時 令和4年10月12日(水)19時

00分

場所 集会室およびオンライン

(Zoom)

【出席者】古野会長、坂井・橋本各

副会長、柏・萩原・南久松

各常務理事、松原・松田・

清水・飯田・久保田・平川・

川瀬・長島各理事、黒川・

佐野各監事

【欠席者】山本副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・秩父宮記念山岳賞候補者の推薦について審議した。橋本(賛成14

反対0)

2・高額寄付金(重廣会員)の受入れについて承認した。南久松(賛成14 反対0)

反対0)

3・家族登山普及委員会の名称変更を「子どもと登山委員会」に変更することについて承認した。飯田(賛成14 反対0)

4・東北大学近藤倫生教授が代表の「ネイチャーポジティブ成長社会実現拠点」への参画することについて承認した。飯田(賛成14 反対0)

1・「上高地再生と安全プロジェクト」への松本市からの依頼(広報協力)について協議した(柏)

【協議事項】

【その他】

1・「山」10月号発行について(節田)

田)

【報告事項】

1・正会員8名、準会員11名の入会承認報告があった(古野)

2・寄附金および助成金11件の受入れについて報告があった(南久松)

3・寄付金に関する会計要領の制定について報告があった(南久松)

4・創立120周年記念寄付の状況について報告があった(柏)

5・ヒマラヤキャンプの途中経過について報告があった(柏)

6・国際山岳年プラス20シンポジウム名義後援について報告があった(久保田)

7・講演会「雪崩から身を守るために」2022名義後援について報告があった(川瀬)

8・年次晩餐会の準備状況について説明があった(長島)

9・YOUTH CLUBの組織改編案について説明があった(松原)

10・支部主催の山岳祭への補助について提案があった(坂井)

11・「エベレスト写真展」富山について説明があった(飯田)

【その他】

1・「山」10月号発行について(節田)

田)

ルーム日誌

10月

寄附金および助成金などの受入報告(10月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
匿名希望	12	山岳会活動全般寄付
(株)池袋松屋	110	本部ルーム ロールカーテン代金寄付
宮下 友樹 様	12	山岳整備のため
沖津 吉信 会員	20	岐阜支部50周年記念事業寄付
日向 祥剛 会員	300	北九州支部ルーム運営資金 寄付

3日 総務委員会
4日 スケッチクラブ
5日 山行委員会 山岳古道PT
6日 YOUTH CLUB
11日 フォトクラブ アルピニズ
ムクラブ マウンテンカル
チャークラブ
12日 理事会 休山会 山想倶楽
部
13日 総務委員会 九五会
15日 アルピニズムクラブ
18日 フォトクラブ

19日 三水会 つくも会 かつぱ
の会
20日 会報編集委員会 図書委員
会 学生会 みのり山の
会

24日 総務委員会
25日 緑爽会 00会 平日クラブ
26日 子どもと登山委員会 二火
会 麗山会
27日 総務委員会 山遊会
31日 資料映像委員会
10月来室者 166名

会員異動 物故

石坂昭二郎(4037) 22・10・13
末廣 坦(12641) 22・6・23
浅野巨寛(13581) 22・10・10
菊池道彦(15114) 22・10・16
退会
米村清一(10314) 北海道
長尾律子(13901)
望月祐汰(15636)
泉美喜雄(16576)

INFORMATION

インフォメーション

ANNOUNCE

◆2022 山の絵展

中村好至恵

会場 横浜・みつゐ画廊 横浜市

中区吉田町5-1

会期 12月12日(月)～21日(水)

時間 午前11時～午後6時

画廊問合せ

TEL 045・261・3321

内容 山の中など現場で描いた山
の水彩画を中心に展示

*新刊画文集『水彩(みずいろ)の
山の記念販売も行ないます。

「山の絵」HP <https://yamano-jindo.com/>にて
詳細を掲載

訂正

会報10月号(929号) 13ページ
「想い出の分水嶺を行く」文中、
(のちのツルコース)とあるのは
(後のツルコース)の誤りでした。
訂正させていただきます、お詫び申し
上げます。

〈会報編集委員会〉

図書受入報告(2022年9月～10月まで)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
佐藤要(編)	鳥海山 :雪と氷の季節	128p/15cm	佐藤要(私家版)	2022	著者寄贈
上田優紀	エベレストの空 (光文社新書 No.1210)	267p/18cm	光文社	2022	出版社寄贈
川越はじめ	1800山登頂の記 :1957～2020年	184p/26cm	川越はじめ(私家版)	2021	著者寄贈
互井健悟(編)	ヒマラヤの御大 宮下秀樹追悼集	144p/22cm	登高会・慶応義塾體育會山岳部	2022	発行者寄贈
谷口敏子	歌集 山旅	177p/20cm	江南書房	2022	著者寄贈
小高要(編)	岳人 創立76周年記念号 :1946～2022	112p/26cm	東京岳人倶楽部	2022	発行者寄贈
よーこ・たいしょー	源流居酒屋	176p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
川上新一	変形菌 :発見と観察を楽しむ自然図鑑	272p/19cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
佐々木洋平	佐々木洋平自叙伝 :狩猟に未来を	207p/19cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
新井文彦	あした出会えるきのこ :散歩道の図鑑	192p/18cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
藤井一至	大地の五億年 :せめぎあう土と生き物たち(ヤマケイ文庫)	312p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
山野井泰史	山野井泰史 全記録 :Chronicle	256p/21cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
八嶋寛	防災アウトドア術 2022年版 :災害から守る知識、技術	85p/30cm	メディアデザイン	2022	東北アウトドア情報センター寄贈

◆編集後記◆

●「島の山旅」シリーズで、千葉支部の皆さんと小豆島に行ってきた。小春日和の下、その名も美しい星ヶ城山の西峰では期待どおりの展望が得られ、瀬戸内らしい穏やかな波の彼方に、特徴ある屋島の台地が印象的でした。それにも増してインパクトがあったのは五剣山の山容で、また一つ「気になる山」が増えてしまいました。

●小豆島から高松港に渡って飯野山(讃岐富士)に登り、丸亀城にも登城してきました。夜は、尾野四国支部長に連絡して、せっかくですから支部間交流をしましょうと提案したところ、支部長以下11名もの参加者と立派な宴席を設けていただき一同大感激。さすが四国は「お接待の国」、大いに盛り上がったことでした。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 930号

2022年(令和4年)11月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 古野 淳
 編集人 節田重節
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社